

リニューアルのごあいさつ

時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。

日頃はアメリカ穀物協会の活動へのご理解ご協力ありがとうございます。

アメリカ穀物協会日本事務所が発行しておりますニュースレター「NETWORK」は、昨年4月に第64号を発行することができました。しかしその後、日本事務所を取り巻く情勢の変化により、やむなく約1年間のお休みをいただくこととなってしまいました。関係の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。

このたび、NETWORKを新たな情報提供誌として皆様にお届けすることとなりました。リニューアルしたNETWORKは、毎月1回をめぐりに発行していく予定です。今後は、米国産トウモロコシ、大麦、ソルガムきび（マイロ）、DDGSなどの穀物とその共産物の世界や米国での需給、生産動向、家畜飼料や健康志向食品原料としての利用などについて、アメリカ穀物協会主催セミナーの内容、そして、米国生産者の声など、皆様に有益な情報提供を行ってまいります。

アメリカ穀物協会日本事務所では、米国からの情報提供をこのNETWORKや、セミナー、ウェブサイトなどを通して行っていくと同時に、皆様の声をできる限り多く、頻繁に産地である米国に届けたいと努力しております。今後とも、これらの双方向コミュニケーションを、皆様のニーズに即した形で行ってまいります。ご意見、ご要望などがございましたら、ご遠慮なく日本事務所までにお送りいただきたくお願い申し上げます。

2013年3月

アメリカ穀物協会 日本代表 浜本哲郎

地産地消と顔の見える関係

本稿は米国アイオワ州の農家、シャープブラウン氏のブログ Suzanne's Common Groundの記事を翻訳したものです。シャープブラウン夫妻（ジョーとスザンヌ）はトウモロコシと大豆を生産するアイオワ州北部の農家で2012年10月に日本のトウモロコシ関係者が視察訪問をいたしました。本稿の元のブログは（www.suzannecommonground.blogspot.com）をご覧ください。また、シャープブラウン夫妻のブログにはトウモロコシの生育時期には生育状況を写真で伝えるGrowing Season Picturesというコーナーもあります。

私たちにとって秋はてんやわんやのシーズンです。コンバインを使っての刈り取り、収穫されたトウモロコシと大豆の集荷エレベーターやエタノール工場への運搬、種子会社の成績管理のための収穫穀物の重量測定、それに息子たちを手伝わせるのも一仕事です。そんな10月後半のある朝、特別な友人を農場に迎えることになりました。束の間、少し気持ちをリラックスさせて、トウモロコシの「お客様」目で農場の作業を見つめなおす時間を持つことができたのです。

ちょうど地産地消の記事を読んだばかりだったので、そういった点からこの友人たちの訪問を見てみることにしました。私は食品に限らず、ふだんは地元の産品を買っています。しかし、何千キロも離れた土地で作られた作物を食べ物にするというのは、どういう気持ちができるものなのでしょうか？どこか

らそのような作物がやってくるのかを知ることは、地元の作物を買うことと同じくらい重要なことなのかもしれません。

私たちが迎えたのは、アメリカ穀物協会が主催した日本のお客様たちです。22人の多様な人たちでしたが、全員米国産トウモロコシというキーワードでつながっている人たちです。配合飼料会社、デンプン製造会社、穀物購買担当者や経済専門家、そして大学の先生や環境問題の専門家もいました。日本はちなみに世界で最も大きい米国産トウモロコシのお客様です。



日本のお客様がバスで到着しました。

日本の皆さんは大きなバスでやってきました。まずは、座学です。私たちの農場や家族の話から始めました。息子の一人がブロードの髪と青い目をしていたのが、日本のお客様の注目を集めました。

質問は多岐にわたりました。遺伝子組み換えと非組み換えのトウモロコシ両方をなぜ作るのか、もう10月26日で、こんなに寒くなってもまだ畑にトウモロコシが残っているのはなぜなのか、このような大きなトラクターやコンバインをどうやって畑に入れるのかなどといった質問です。



まず、夫のジョーが種をまくトウモロコシの品種をどのように決めるのかを話しました。何人かの人はヘッドホンをしていましたが、それで通訳の日本語を聞くのだそうです。初めて見る機械ですこしびっくりしましたが、なかなか便利そうです。

遺伝子組み換えトウモロコシと非遺伝子組み換えトウモロコシの外見に違いがないことを見てもらうため、私たちは畑からトウモロコシを何本か持ってきました。まず、日本の皆さんはトウモロコシの実物にとっても感激していました。どのような形であれ、仕事やビジネスでトウモロコシにかかわってきた日本の方々でしたが、これまで、畑にあるトウモロコシを見たことがなかったのです。



次に、農場にあるサイロピンにお連れしました。収穫したトウモロコシが、どのようにしてトラックに載せられ市場に運ばれていくのかを見てもらうことができました。トウモロコシが運び込まれ保管される様子を非常に興味深そうに見学していました。

以前に、地元の仲介業者を通じてビール醸造用のトウモロコシを日本に販売したことがあります。そのときは、需要者の方がトウモロコシ穀粒のストレスクラックを非常に気にされていたので、それ以来トウモロコシ乾燥後の冷却をとってもゆっくりと行っています。



訪問の最後は、農場に出てコンバインでの刈り取り作業の見学です。そこでわかったのは、男の人というのは誰でも、車輪の付いている機械には目がないのだということです。



日本のお客様は、バスから降りてから、ほんの何分かの間に何百もの写真を撮っていました。父がコンバインを近くまで乗ってきて、サイドパネルを開けて見せた時も、確実に何百も



のシャッターが切られていました。

最初は驚かされましたが、確かにその通りだと納得させられた質問がありました。グループの中の一人の方が、コンバインの後ろからは何が出てくるのかと尋ねたのです。それはコーンコブと呼ばれるトウモロコシの身の部分の軸です。さらに、彼はそのコブは利用しないのかと尋ねたのです。



彼にとっては、それは無駄なことに映ったのです。実際には、コブや植物の残さは冬の間、土壌を保護すると同時に、それらが分解して最終的には栄養となって土にかえると説明すると、実に環境にやさしい利用法ですねと納得していました。



トウモロコシのイヤーを割ったところ
トウモロコシの穀粒はまだコブに付いている。

さて、最初の疑問に戻ってみましょう。どこから作物がやってくるのかを知ることは、地元の作物を買うことと同じくらい重要なことなのではないでしょうか？日本のお客様と過ごした私はこう考えるようになりました。確かに地元産を買うのは、地域の経済を活性化するためにもよいことですが、遠く離れていても、その生産者を知ること **「顔の見える関係を築くこと」** も、同様に重要なことです。そして、作物がどのような人が生産したものなのかといった情報をもとに、どれを買うのかを決めることも地産地消と同じではないかと思うようになったのです。今回、日本からいらっしゃってくれた、私たちのトウモロコシのお客様が、帰国してから、実際に購入しているトウモロコシをもっと身

近なものとして理解を深めてくださったと信じています。

日本には、トウモロコシのような作物を生産するために十分な広さの土地がないのであれば、米国産トウモロコシを地元の作物と捉えてもよいのかもしれませんが。米国以外に、高品質のトウモロコシを安定して供給できる国は限られています。皆さんはこのような地産地消 **「顔の見える関係」** の考え方についてどう思われますか？



トウモロコシのコブを手にとって観察



ここで置き去りにされるためなら何でもすると言っていました。そうすれば、このままコンバインに乗っていられると。



集合写真！

私たちの農場を訪問してくださった日本のお客様に感謝します。私たち家族にとっても、お客様に思いをはせる貴重な機会となりました！

日本向け米国飼料穀物輸出の歴史

報告書要旨：

この報告書「日本向け米国飼料穀物輸出の歴史」は、米国農務省海外農務局（FAS）日本事務所が、日本向け米国農産物輸出の歴史に関する報告書のシリーズの一つとして2008年に作成したものである。英語版の報告書は米国農務省海外農務局のウェブサイト（<http://www.fas.usda.gov/>）よりGAIN Report No.: JA8521としてダウンロード可能である。

「ホッグリフト」

日本は米国飼料穀物（トウモロコシ、大麦およびソルガム）の最大の海外市場であり、年間1,600万トンを超える穀物を米国から輸入している。この米国飼料穀物の巨大市場は、アメリカ穀物協会、米国農務省海外農務局（以下FASと表記）および日本の畜産・養鶏業界による市場開発努力、ならびに「ホッグリフト」として広く知られる機会提供にその源を辿ることができる。事実、アメリカ穀物協会の起源は1959年の「ホッグリフト」にある¹。日本で最も畜産が盛んな県のひとつである山梨県がこの年2度の台風に見舞われた際、米国農業・畜産業界および米国政府が同県の養豚業界の復興を援助した「ホッグリフト」は伝説的史実である。

アイオワ出身のRichard Thomas曹長は在東京米国空軍で広報活動に従事していた²。山梨県の畜産業界の被害が甚大であることを知ったThomas曹長は、アイオワの豚を送って畜産業界復興の手助けをすることを考え付いた。彼は東京にある在日米国大使館の農務担当官であったDon Motzにこの計画を知らせたところ、Motzはこれを歓迎し、輸送準備に取り掛かった。

全米トウモロコシ生産者協会（NCGA）の会長を務めていたWalter Goepfingerはこの「ホッグリフト」構想を熱く支持し、アメリカ穀物協会の創立を図った。FASの局長であったReimond Ioanesが支援を約束し、ワシントンの日本大使館農務担当官もこれに同意した。

アイオワの畜産業者が36頭の豚（うち1頭は輸送中に死亡）を寄贈することになり、米国空軍はこれらの豚を日本に届けるため飛行機を提供することに同意した。アメリカ穀物協会の40周年記念刊行物には次のように記載されている。「豚を日本に届けるのは容易なことではなかった。アイオワトウモロコシ生産者協会の会長であったRoscoe Marsdenは寄贈用としてアイオワの畜産業者から赤身肉の36頭の繁殖豚を駆り集めた。これらの豚は特別製の木箱を取り付けた空軍の貨物機で輸送された。Marsden、彼の妻KayおよびNCGAの責任者であったAlbert Millerが豚に付き添った。当時は貨物輸送用のジェット機がなく、豚とそのエスコートたちは鳥々を経由する落ち着かない長時間の太平洋飛行を余儀なくされた。MillerとMarsdenは豚が熱でやられないよう、各経由地で豚に水浴びをさせた。」³



友好の鐘と鐘楼

「無事山梨に到着した豚は、新たな施設で天寿を全うし、同県において子孫を繁栄させた。関係者の試算によれば、9年後にこれらアイオワ豚の最後の1頭が死亡するまでに、子孫は合計500,000頭ほどになり、大量の飼料が消費された」「ホッグリフト」以降、日本では山梨県およびその他地域において近代的な養豚産業の成長が始まった。1959年の「ホッグリフト」の結果、今日日本で飼育される豚の多くはアイオワ豚と遺伝的なつながりを持っている。

「ホッグリフト」にまつわる民間レベルの交流も同じく感銘深いものとして残っている。1960年にアイオワと山梨県は姉妹提携を結んだが、こうした類の関係は日米間初のものであった⁴。その後50年余りの間に、山梨とアイオワの友好関係はさらに発展していった⁵。教師、農家、芸術家、実業家、学童を含め、何千もの人々が山梨とアイオワの間を行き来してきた。例えば、多くの山梨県民がアイオワを横断する1週間の自転車レースであるRAGBRAIに参加し、一方アイオワ住民は日本の最高峰であり、国家の象徴的存在である、山梨県の富士山に登っている。更に、「ホッグリフト」以降の歴代すべてのアイオワ州知事が山梨県を訪問している。

山梨県も「ホッグリフト」を以ってアイオワが示してくれた好意に対して返礼している。1962年、山梨県民はアイオワに「友好の鐘」と鐘楼を贈り、今でもそれは州議会議事堂の南側に設置されている。アイオワが1993年大洪水の被害を被った際には、山梨県は洪水被害の義援金として300,000ドルを寄贈した。2010年には、アイオワと山梨県は姉妹提携50周年を祝う予定である。

(注)2010年4月に50周年式典が山梨県にて盛大に行われた。

(次号に続く)

- ¹ "40 Years of Change: The U.S. Grains Council's Ongoing Story," U.S. Grains Council, 2001, p. 10.
- ² "Partners in Developing Farm Markets Overseas," James O. Howard and others, U.S. Agricultural Export Development Council, 1989, p. 8.
- ³ "40 Years of Change: The U.S. Grains Council's Ongoing Story," U.S. Grains Council, 2001, p. 10.
- ⁴ "The History of the Foreign Agricultural Service: Helping U.S. Producers Feed, Clothe and House the World," by Ryan Swanson, AgExporter, March 2002, p. 4.
- ⁵ "Sweet Corn and Sushi: The Story of Iowa and Yamanashi," by Lori Erickson, Illustrated by Will Thomas, McMillen Publishing, pp. 12-13.

ネットワークに関するご意見、
ご感想をお寄せ下さい。



U.S. GRAINS COUNCIL アメリカ穀物協会

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目6番19号
KY溜池ビル4階

Tel: 03-3505-0601 Fax: 03-3505-0670
E-mail: grainsjp@gol.com

本部ホームページ（英語）：<http://www.grains.org>
日本事務所ホームページ（日本語）：<http://grainsjp.org/>